

オモフ（思）とユフ（恋）の違い

内田賢徳

オモフ（思）は、色々の意味をもつ多義的な動詞だが、総じて心の中で様々なことを感じ取り、考えることを言う。古例、

道の後しり 古波陀嬢子こはだをとめは 争はず 寝しくをしもぞ うるはしみ思ふ（意母布）

〔『古事記』中巻 応神 へへ内は原文表記。以下同じ〕

古波陀嬢子は応神天皇が日向から召したかみながひめ髮長比売、それを太子の大雀命おほささぎのみこと（後の仁徳天皇）が自分のものにと望んで手に入れるという筋での歌。天皇に召される栄えある身であったはずだったのが、太子とはいえ、格下に与えられてしまった、それでもこの嬢子は私を拒まなかった、それを心の内に「うるはし」と思ったと歌う。ウルハシとは、「大和しうるはし」〔『古事記』歌謡 倭建命やまとたけるのみこと）とあるように、整って立派だという意味。ここでは髪長比売の自分に対する素直な心根をたたえている。オモフ（思）は、そういう心のあり方であったと感じ取ったということ。「人を思ふ」という場合、

御諸みもろの その高城たかきなる 大韋古おほみこが原 大猪子おほみこが 腹にある 肝向きむむかふ 心をだにか
かへ迦か あひ思はず（淤母波受）あらむ 〔『古事記』下巻 仁徳〕

に見られるように、心を寄せるということになる。この歌、「思はず」とあるから、心を寄せないでという否定の意味になりそうだが、上に助詞力があると、その否定的なことがらを疑問として、とてもそうはできまいというように反語的になる。アヒく（相く）という表現は、一般にお互いにというように受け取られているが、古代語の「あひく」は、こちらへの働きかけに相手も応じてくするということである。ここは、遁走して行く大后石之比売おほきさきいほのひめに対して懸命になだめる仁徳天皇が、自分の思いに伝えてくれないなんてありえないよねと虫のいい歌を贈る場面、大后はもちろんさらに怒りを増して、使いに会おうともしない。「大韋古」から「大猪子」に転換して、その腹で肝臓と向かい合っている心臓、つまり心というように展開するテンポは、この仁徳のお調子者のような求めと見合っている。心を寄せることは、『万葉集』で、

宇治川の水沫みなわさかまき行く水の事こと反かへらずそ思ひそめてし（思始為）

〔『万葉集』卷第十一・二四〇 人麻呂歌集 寄物陳思〕

のように見られる。相手を思うことが宇治川の流れのように速く盛んで、しかも始まったばかりでも元に戻ることはないと言意を歌う。同じ人麻呂の歌、

笹の葉はみ山もさやにさやげども我は妹思ふ〈吾者妹思〉別れ来ぬれば

『万葉集』巻第二・二三 「石見相聞歌」反歌

では、さやぎ乱れる山の笹はそれとして、私はそのように揺らぐことなく妹を思っている、別れてきたその分だけ一心不乱にと、一途な思いを表している。

コフ（恋）は、オモフ（思）が、意志を表す場合（「国土を生み成さんと以為ふ」『古事記』上巻）があるように、どちらかと言えば意志的・能動的であるのに対して、自発的・被動的な趣がある。オモフ（思）が心を寄せることであるのに対して、心が引かれるというのであろうか。

吉野宮に幸せる時に、弓削皇子、額田王に贈り与ふる歌一首

古に〈古尔〉恋ふる〈恋流〉鳥かもゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く

『万葉集』巻第二・二二

額田王の和へ奉る歌一首〔倭京より進り入る〕

古に〈古尔〉恋ふるむ〈恋良武〉鳥はほととぎすけだしや鳴きし我が思へる〈念流〉こと

『万葉集』巻第二・二二

このように「く」に恋ふ」と使われる。ニは行き着く先、帰着点を表す。この額田王歌、ホトトギスは「古」に心引かれて鳴くのであり、私は「古」に心を寄せるのである。この時、持統朝、「古」は天武天皇の時代を指し、歌を贈ってきた弓削皇子は天武天皇の皇子であるから、額田王とは親子ほどの年の差がある。「倭京」は天武朝の飛鳥浄御原宮のあった都。なお、「念流」は、元暦校本など平安朝の古写本の本文で、鎌倉時代の仙覚の校訂本は「恋流」とある。アガオモヘルゴトでは字余りになるのでコフルに変えたものか。この場合字余りは、オを含むので許容される例である。ただ「く」を恋ふ」の例もある。

鏡王女の作る歌一首

風を〈乎〉だに恋ふる〈恋流〉はともし風をだに来むとし待たば何か嘆かむ

『万葉集』巻第四・四八九

助詞ヲは、「木を切る」のような対格を表すように扱われているが、「湯（お茶）を沸かす」というように対格でない用法もある。対格なら「水を沸かす」である。「湯（お茶）を沸かす」は非論理的な誤りではなく、日本語のヲは意識の志向方向を指定する助詞であって、対格が本来なのではない。

灰のなかに母をひろへり朝日子ののぼるがなかに母をひろへり

〔斎藤茂吉『赤光』「死にたまふ母」〕

「灰のなかに母をひろへり」は、骨を拾うことだが、勝義には生死を分けた母と出会いなおすこと、新しい母を見出すことである。「くゝに恋ふ」が心引かれる帰着点を示すのに対して、「くゝを恋ふ」は心が引かれて行く方向を示していることになる。

しかし、「人を恋ふ」となると例が乏しく、その例とされる

高浜の 下風さやく 妹を恋ひ 妻と言はばや しこめしつも

『常陸国風土記』茨城郡歌謡

は、該当部分が諸本に「伊毛乎比川麻止伊波阿夜」とあつたものを、近世の版本（西野宣明『訂正常陸国風土記』天保十年（一八三九））がこのように校訂したもので疑わしい。さらに、上代特殊仮名遣いでは「恋ひ」のヒに比の字は使わない。コヒ（恋）は甲類のコと乙類のヒという音で、比はそれと異なる甲類のヒであった。コヒでヒが甲類になるのは、「乞ふ」の意味の動詞連用形で（こちらはコが乙類）、別の語である。近世にはまだそのことは十分に知られていなかった。相手に自分への愛を乞うから恋と言うのだというのは、全くの俗説である。

「人に恋ふ」は、そこに心引かれて術ない状態になることを意味した。

古にありけむ人も我がごとか妹に恋ひつつ（妹尔戀乍）寝ねかてずけむ

『万葉集』巻第四・四九七 柿本人麻呂

「思ふ」と「恋ふ」、私たちはその区別をどこかで保っているのだろうか。「愛しています」「I love you」、漢語由来の表現と全くの外国語の使用が一般的な時代、自分が相手を思っているのか相手に恋っているのか、問うてみても、「それってなにかちがうくない」と返されそうである。